

# 子育てと家族

開催日 平成19年5月25日

講師 本学教授 江上 芳子

## 1. 育児不安

母親の育児不安（心配事、懸念、嫌だと思うこと、嫌だと思う自分が嫌だなど）がいわれて久しい。それらの要因には多くの事が挙げられている。そのなかでも母親が孤立したなかで子育てをしていることが大きい要因の一つとして指摘されている。

育児の技術は経験を通して習得される部分が多い。しかし、少子化、核家族化のなかで若い世代の母親の多くは、成人するまでに子どもと触れあう体験が少なく、また、子どもの世話を身近に見ることも少ないため、子育ての技術を持たない。昔ならば、実家の親や姑に助言や助けをもらえたが、今日、身近に育児をサポート・助言する人がいない。そして、母親になれば、育児は当然できるものとして捉えられていて、できないとだめな母親の謗りを受ける。子どもとつきあうことがどのようなことかわからないままに親になり、子どもを持ってどのように育てるか、自分の思い通りにならない子どもにどのように対処するか当惑し、不安を持つ母親が多い。

## 2. 育児と家族

社会の発展と変化に伴って家族関係、夫婦関係が変化し、子育ての環境も変化してきた。子育てにとって、家族関係、育児関係は重要な位置を占める。昔は、子育ては家族全員で行っていた。祖父母の役割、母親、父親の役割、きょうだい（姉）の役割などが暗黙のうちであり、母親を助ける仕組みが合った。父親は直接オムツを変えたり食事を作ったりはしなくても、一家の柱として子どもの社会化への影響力をもっていた。今日、育児への介入を疎ましく思う母親は、相補的關係である祖父母を敬遠し、育児の伝承も受けず、また育児の助けを求めることもできず、ひとりで苦戦し悪循環を招いている。

子どもが誕生すると、子どもの誕生までの夫と妻の役割に父と母という新しい役割が加わり、夫婦関係と親子関係の二つの立場での役割をともに果たすよう調整し統合する必要がある。しかし、実際親役割を遂行するのは殆どが母親である。また、子ども誕生以前は夫と妻であった二人は、子どもの誕生を機に夫婦関係は後退し、夫は職業人、妻は母親へと性別で職業と親業を分担する形に移行する。そして、家族の主軸は親子（母子）関係となってゆく。子ども中心と性別分業は、専業主母の母子密室育児、過保護、単一価値による集中介入の弊害を生じ、さらに育児不安を生じるのである。

夫との情緒的關係が良好で、夫が協力してくれる、夫とのコミュニケーションが満足できる基盤があってはじめて、母親は子育てを楽しみながら専念できるのではないだろうか。

## 3. 自分の家族流子育て

子どもを育てるとは、子どもを心身ともに健やかに育てる行為であり、心身の成長・発達を促進し、基本的な生活習慣の自律をはかり、社会に適応する能力を育むことである。そのなかで、清濁あわせ呑み込む愛情（母性）とものごとの規範を示す（父性）が重要といわれている。自分の大切さを実感でき、自己実現に向かって自分なりに努力し、自分で自分の行動の責任がとれる子どもに育つように、本気になって叱る厳しさと愛情でかかわることが大切である。また、自尊心を育てる、自己肯定感を育てることも重要で「7つ誉めて、3つ叱れ」というように、失敗に着目せずできたところを誉め、誉めて育てることが重要である。ひとりで育てるとこのことが難しいが、家族で育てることにより多面的な見方ができて効果がある。子育てに家族でかかわる「自分の家族流」を見出すことを勧める。